

「やらない理由並べてないで、とつととやったらいいんですよ」

美貌の青年の放言はインタビュアーの顔を引きつらせた。

「そうですね。凡人は中々行動できませんからね。やはり高宮さんのような天才が輝くんでしょうね！」

内心では生意気な彼に対する悪口でいっぱいだろう。プロはすごい、すぐに気を取り直して10歳以上年下と思われる高宮に追従する。

言われた高宮はそういうことじゃない、といささか見下したような、憐れむような表情をする。

こういう態度が彼に熱狂する信奉者とアンチの両方を量産するのだろう。

テレビ画面の右下のテロップには『若きカリスマ経営者 高宮 蓮斗（たかみや れんと）に迫る！』と表示されている。

（カリスマ経営者か……）

つつい、テレビに気を取られて朝食を食べる手が止まってしまふ。気づいた母がわたしに声を掛ける。

「パパを思い出すわね。パパはこんなにイケメンじゃなかったけれど！」
そう、わたしのパパもこんな感じだった。

10年前に一世を風靡した経営者。堀沢 幸作（ほりさわ こうさく）がわたしの父だ。

IT革命のブームに乗ってインターネットで起業し、既得権益を壊す若者の代表だった。時代の寵児とまで言われ、会社はマザーズ上場まで果たしたのだ。

熱狂の分、その終わりもあつという間だった。出る杭は打たれる、のことわざ通り一緒に起業した腹心の裏切りやメディアからのバッシングで会社はあつけなく倒産した。

普通なら、上場企業が倒産した場合に社長が個人的に借金を背負うことはない。けれど父は会社の拡大時に銀行からの融資を個人保証で借りていた。5億もの借金を背負ったのだ。

周囲は個人破産をすすめたけれど、意地になった父は受け入れなかった。プライドもあるし、再起を狙ってもいた。個人破産をしてしまうと再起は難しい。

ただ、父も自分の意地に妻子を巻き込むのは本意でなかった。離婚して生活と財産を切り分け、子どもであるわたしの将来を守るという決断をしたのだった。

頑固な父に理解のある母は受け入れた。わたしは堀沢姓でなくなり、母とひとつそりと暮らしている。結果、二人が離婚したおかげで大学に通えている。

父はと言えば妻子と別居した当初は次のビジネスを色々と仕掛けようとしていた。

10年が経った今では気概を失ったようで、負債を返済するだけの生活をしていると聞いている。借金はまだ3億残っているらしい。

（だったら、借金を返して家族一緒に暮らしたい）

誰にも言っていないけれど、それが本音だった。

（良かった、座れた）

今日の大学は2時限目から通勤・通学ラッシュと若干時間帯がずれている。京成線はこれから接続する都営浅草線より混雑がマシだ。

1限の時はわたしの住んでいる葛飾区からだ、朝の7時台に家を出ないといけない。そうするとラッシュに巻き込まれて座れたことはあまりない。一時
間半の通学時間は実家生にしては普通ではある。一人暮らしなのに寝坊して1
限をパスしたりする同級生はザラにいる。彼らに流されないようにするのは結
構難しい。

六本木の高級マンションから今の葛飾区のマンションに引っ越したのは離婚してすぐのころだ。部屋が狭くなり、グレードが落ちたと最初はがっかりしたが、今ではこちらの方が落ち着く。

座席に座れたのでスマホでXのアプリを立ち上げる。

『男の人ってどうして家族より成功が大事なのか』父と朝のワイドショーを思い出して、ポストする。

このアカウントはオフのわたしを知っている人には誰にも教えていない。プロフィールも個人を特定できないものにしてある。いわゆる裏垢みたいなものだ。

病んでるとかじゃないけど、口に出して誰かに聞かせるには気がひける感情の捨て場になっている。

予想通り、乗り換え後は混んでいた。体力と気力を削られながらようやく大学に着いた。

2時限目の経営戦略論の教室に入る。今日は2人1組のディスカッションがある。わたしはいつも通り高校時代からの友達とペアになろうと思っていた。ふと教室の部屋の中央にポツンと誰とも組めてない子がいる。

都内の私大と違って、ここは公立大で堅実なタイプの学生が多い。

ブランド物のバッグとジュエリーを身に付けたド派手なタイプ。パパ活女子
というか港区女子というかとにかく夜職の雰囲気が出て、明らかに浮いてい
た。

「ごめんね。今日は別の子と組んで」

友人にそう言って、わたしはド派手女子の方へ近づいて行つた。

「一緒に組む？」

声を掛けたら、彼女は驚いたような顔を一瞬したけど笑顔で答えた。

「ホントに？ 助かるー！ ありがとう！」

授業は無事に終わった。服装は派手だけど、授業中は意外に真剣だった。内
容のあるディスカッションができて楽しかった。

「今日はありがとね！　誰も組んでくれなかったら単位危なかった。あたし、こんな服着てるから浮いちゃって」

「ううん、外縫いのケリーにアルハンブラ、良く似合ってるよ」

「え、あなたの服のテイストとは全然違うのに良く知ってるね！　そうなの、浮いてても好きだから着てね。気に入ってる」

（しまった！　ハイブラに詳しいのバレちゃう）

父の会社がうまく行っているころはありとあらゆるブランド品を身に付けた女性社員をたくさん見た。自然に覚えてしまっている。

何せママも実は元モデルだ。今でこそ落ち着いているけれど、一通りのブランド物は持っていた。

「この授業以外は何とってる？　また会えたら嬉しい！」

真っ直ぐに好意を伝えてくる彼女がまぶしい。服装で避けてた人たちにこの魅力を伝えてあげたい。

「それが、就活終わってて。単位はほとんど取り切ってるんだ。あとはこれとゼミくらいで」

「そうなんだ！　偉いね。ちょっと残念。でも、時間いっぱいあるのはいいね」

「そうなの。せっかく時間あるからバイト始めようと思って。しっかり稼ぎたくて」

彼女は軽く首をかしげる。花のモチーフのピアスがキラキラと揺れる。

「わたしのバイト紹介してあげようか？　ラウンジなんだけどね、時給は5000円でたいしたことないんだけど」

「えー！ 5000円！ 十分すぎだよー！」今のところ候補にしていたコンビニの時給は1500円だ。正直、もっと時給の高いバイトがないか探していたところだった。

「お客さんからのオプシヨンのリクエストがあるのが特徴でね。金額も内容も、自由にお客様が決められる。まあ、結局エッチなリクエストが多いんだけど」

「ちょっと風俗みがあるってこと……？」

わたしの言い方に彼女は吹き出した。

「はつきり言うなあ！ まあそうなんだけどね。風俗だと店が決めたオプシヨンなら断れないでしょ。キモい客とそういうことするのなんて絶対やだし」
そういうものなのか。知らない世界過ぎる。

「でも、ここのラウンジはオプションを自由に断れるの」

「断ったりしたら、お客さん不満なんじゃないの？」

「お金さえだせばエッチなことできるだけじゃ面白くないでしょ。それこそ風俗でいいじゃん」

「それは、そうなのかなあ」

「ステイタスがあったりイケメンだったりしないとリクエストが受け入れられないのがいいの。自己顕示欲を満たせるのが人気みたい」

「はああ……。住んでる世界が違う……」

「でも、すっごく稼げるし。私もイケメンのリクエストしか受けてないけど稼げてるよ」

身に付けているブランド品の数々が説得力を増している。

（この子、どこまでえっちなことをしているんだろう……最後までしてたりするのかな……？）

彼女がイケメンと裸で絡み合っている想像がよぎり、頬が熱くなる。

「あたし、エッチなことは嫌いじゃないのよね。相手がイケメンなら」
どこまでも素直かつ率直で感心してしまう。

「あなたよく見たら顔整ってるし。昔のモデルの誰だっけ、日焼け止めのCMに出てた……。似てるって言わない？」

（ママだ！ 最近、ちょいちょい言われるようになってきたのよね）

「まさか！ 言われないよ」

「ホント？ スタイルもいいし。似てると思うんだけどな。ラウンジ、人気だからなかなか入れないけどお札に推薦してあげるよ、お金必要なんでしょ？」

それは、そうなのだった。父の借金は3億円。返したらまた家族に戻るかもしれない。少しでも足しになるなら稼ぎたい。

「ありがとうございます」

こうやってわたしはちよつとエッチなバイトをはじめることになったのだ。この時はあんな目に遭うとは全く想像してなかった。

ついに初出勤の日が来た。西麻布の会員制の超高級ラウンジ。内装はボルドーのベースカラーを中心に落ち着いた配色だ。そこにゴールドのアクセントカラーが要所に使われており高級感を演出している。調度品も一つ一つが豪華だ。

（照明、暗め……。えっちなことがしやすいため……。？）

なんて思ってしまったてドキドキする。

ラウンジでの服装は例の彼女に選んでもらった。想像していたのはテレビで見たことのあるキャバ嬢の服だったが、ラウンジだと少し露出度の高めではあるけれど普通の服に近い。

胸元は谷間が見えるほどあいてるのは気になるけど……。わたしが普段着ているファストファッションに比べると派手で露出度も高いしスカートの短い……。

「あゝ！ いいじゃん！ メイクと髪セットすると別人みたい。わたしの見る目は確かだったかも」

先に出勤していた港区女子が褒めてくれる。

最初に接客したお客様はイケオジって感じの50代くらいの男性だった。

父親と同世代なこともあって、がんばって楽しくは話したけどお客様の方も苦笑いで……。

そんな雰囲気には到底ならず、えっちなリクエストもなくてほっとする。

（いやいや、稼がないといけないんだってば！）

次のお客様は30歳くらいのインフルエンサーだ。キス10000円とおさわり30000円のリクエストがでたけど、断ってしまう。港区女子曰く、「ケチすぎる！断って正解！」とのこと。

（わたし、向いてないかも。全然、稼げない。でも時給高いしこのままでもいいかもしれない、ノルマもないらしいし）

つつい弱い気になってしまい、ため息をつく。次のお客様が来店する。

（え!? あれ? この人、どこかで見たことある……?）

すらつとした長身で、無地の白いTシャツにシンプルな黒いジャケット。

I T 経営者の定番みたいな服装だけど、誰よりも似合っていて様になっている。俳優みたいに整った顔に見惚れてしまう。

（あ！ この間テレビに出てた、そうだ高宮なんとかっていう起業家だ！
すごい、ホントにこのお店って有名人もくるんだ〜）

港区の高級ラウンジはさすがだと感心する。

（実物は背高いんだ〜、テレビで見るよりイケメンなんだな〜、でも怖そう
〜、部下にはなりたくないな〜）

ワイドショーを見ているみたいな気持ちで有名人を眺めていたら。

（ん!? こっち見てる!?）

見ているというより、一直線にわたしの方へ歩いてくる！

「あ、えっと……」

「久しぶりだな」そう言って明らかにわたしに対して話しかけてきた。

「ひ、久しぶり？ お会いしたことないと思いますが……」しどろもどろになりながら答える。

「俺のこと覚えてないのか」

整った顔が呆れたように懨然とした表情で言う。



シヨックだ。彼女が俺を覚えていないなんて。

俺の方はずっと好きで成功したら迎えに行こうと思っていたのに。一度しか会ってないから仕方がないのか……。

あれは10年前。俺は地方の片田舎の閉塞感に嫌気がさして家を飛び出した。ここでは地元の上場企業へ入れば勝ち組みたいなつまらない価値観の人間ばかりだ。

何となく入った高校も全然面白くなくて中退した。勝手に高校を辞めたことで親と大喧嘩になった。

全財産の20万円を持って家出して東京に行った。ずっと憧れていた経営者の堀沢 幸作に会いに行くために。何か成し遂げたいけどどうしたらいいか、情熱を持てあましていた。

突然訪ねてきた、どの馬の骨とも知れない、田舎臭いガキの俺を堀沢さんは暖かく迎えてくれた。激励の言葉も言ってくれた。

「やりたいことをやってみればいいさ」

親や高校の担任などの周りの大人に散々言われてきた。

「おまえみたいな協調性のないやつが、東京で成功するなんて無理だ。諦めて地元でそれなりに生きろ」と。

「パパ、誰か来たの？」鈴が鳴るような声でした。

俺と同じ年くらいの子だった。派手ではなくシンプルだけど都会的で上質な服を着ている。大きな目にスツと通った鼻筋の美しい顔。俺の地元にはこんな洗練された子はいない。

目の前の彼女に何の恨みもなかったが、恵まれた環境が死ぬほど羨ましい。俺だって東京に生まれて、堀沢さんの子どもだったら。

「くそっ！俺だって、環境に恵まれてたら……。俺は絶対に成功してやる！堀沢さんみたいな経営者になってやる」

「パパみたいになりたいの？」彼女は言った。

「あんたも俺みたいなやつには無理だと思ってんだろ。苦労知らずのお嬢様のくせに！」

完全に八つ当たりだった。堀沢さんの娘に失礼なことを言っていることに自覚があったが、感情が抑えられなかった。

「きつと夢は叶うよ。だってあなたパパに似てるもの」

その場に合わせたお世辞でもなく、当然のことのように思ってるような言い方に虚を突かれた。

誰も俺のことを信じてくれなかった。そのたった一言で俺は彼女のことを好きになってしまった。

その言葉を励みにがんばってきた。堀沢さんが会ってくれたとはいえ、甘えたり迷惑をかけるつもりはなかった。会いに行っただけだ。

ちなみに後から知ったが彼女は3つも年下だった。彼女は背が高く大人びていたし、俺は成長期の前で背が低かった。

住み込みでバイトをしながら勉強した。高校認定をとって、堀沢さんの母校である東大へ進学した。さすがは東大で面白いやつも才能があるやつもたくさんいた。地元に行ったら絶対に関わらなかっただろう人種だ。俺がプログラムを組んで、ECサイトのシステムで起業した。この最初の会社をバイアウトして資金を得て、次々とビジネスを手掛けて行った。上場もした。

（まだだ……。まだ会えない）

ただ堀沢さん達の切り開いてくれたレールの上を歩いているようで、彼女に会いに行けなかった。堀沢さん達は何もないところを切り拓いたのだから。

とは言え、起業してある程度の金額が自由になった時点で彼女について調べた。

調査の仕事は側近に頼んでいる。彼は起業当初から俺を見込んで支えてくれている。俺の傍若無人な性格も知り尽くしている。他の人には務まらない仕事だ。彼の前には何人も根を上げた。

彼女の住所や大学、彼氏の有無、ブラジャーのサイズまで調べて彼は言った。

「ストーカーの自覚持つてくださいね。バレたら嫌われますよ」

「わかってるよ！ まだ堀沢さんを超えられてないから会えないんだよ」

「その謎のこだわりあなたしか気にしてませんよ。ストーカーみたいなことするより、さっさと会えばいいのに」

「いいや、会わない！ 堀沢さんを超えるまでは！」

毎日、側近から彼女の報告をもらうようになった。写真や動画、ちょっとした情報などだ。これらを通して、彼女の優しい性格や、頑張り屋なところを知った。変わっていない。一方的にますます好きになってしまった。

そうやって意地になって彼女の前に姿を現すことを先延ばしにしていたら、側近が新しい情報を仕入れてきた。

「社長。例の彼女、港区のラウンジでいかがわしいバイトは始めるみたいです
よ」

「いかがわしい？　どんなバイトだ？」

「金を積んだら、セックスできる店らしいですよ」

「な、なんだと！　それはダメだ！」

「駄目も何も……」

もはや堀沢さんを超えるとか超えないとか言っている場合ではない。

「すぐにそこに連れていけ！」

「まあ、そういうと思ってました。車、着けてますから。乗ってください」

これだからこいつにしか俺の側近は務まらない。有能で運転もうまいし、隙がない。

「俺だって我慢してたのに！ そこいらのくだらないチャラチャラした男達に彼女を触らせる気なんてない！」

テスラの最上級モデルの後部座席でイライラをぶちまける。

「世間的にはあなたが東京で一番チャラチャラした男に見えると思いますけどね」

側近の戯言は無視することにする。

「彼女を連れて帰る、このバイトを辞めさせてくれ」

「あれ？ 辞めさせるんですか。あなたのことなので、てっきり客としてサービスをさせるのかと」

「何言ってるんだ！ 俺は金で無理やりセックスする趣味はない。……って、待てよ？ さっきキャストに拒否権があるって言ってたよな？」

無理やりは嫌だ。だけど、金にモノを言わせるが、合意で彼女を俺のものにできるなら？ むしろ、こんなチャンスは二度とないのでは……。

今まで隠していた欲望がムクムクと息を吹き返す。抑圧し続けた欲望は黒く歪んでしまっていた。



「覚えてないなら、それでいい」

不貞腐れた子どものような顔で高宮というIT社長は言った。

「す、すみません。とりあえず、お酒作りますね」

わたしはマニュアル通りに接客しようとした。肩をトントンと叩かれて黒服に耳打ちされる。特別な客なので個室に案内するようにとのことだった。

「失礼しました、VIPルームへご案内します。こちらへどうぞ」

高宮さんを個室に誘導する。気を取り直して接客する。他愛のない話をしてみると、意外にわたしの話を熱心に聞いてくれる。

端正な顔で見つめられてドキドキしてしまう。テレビでは内容のない話は一言たりとも聞きたくないと言っていた気がするのだけど……。意外に優しいかもしれない？

「ところでこのリクエスト、きみ受け付けてるの？」

金色の飾りの縁取りのついた厚手の手のひらサイズのカードを指さす。雑談の区切りがついたところだった。

「えっと、内容によるんですけど……。ご期待に答えられるよう精一杯努力します」

なんだか就職面接みたいな返事になってしまった。そんな言い方に高宮さんはクスリと笑う。笑った顔はやっぱり不敵でかっこいい。

「じゃあ、まずは手始めにこれはどう？」

リクエスト用紙にサラサラと記入する。渡された用紙を確認する。

「キス……。じゅ、10万円！」

コンビニバイト67時間分！キスくらいなら減るものでもないし……。

（わ、わかってる。金額に目がくらみお金でキスすることを正当化しようとしていることくらい！）

「えっと、はい、お願いします」結局、金額の魅力には抗えなかった。

「へえ……」

それだけ言って、横並びに座っていた高宮さんが一步身を寄せてくる。

ジャケットを着た腕がノースリーブワンピースの素肌の肩に触れる。ふわりと高級そうな香水の匂いがした。

(いい匂い……。クラクラしちゃう)

緊張から手を膝に置いて握りしめてしまう。膝の上の手に高宮さんの大きな左手が重ねられた。右手はわたしの頬に添えられる。

近くで見ると切れ長の目が美しくて、その目でじっと見つめられると心臓が飛び跳ねそうだった。きゅっと目を瞑ると、少し湿った熱い唇の感触がした。

「……んっ♡」

声を漏らしてしまう。すぐに唇は離れ、目を開けると至近距離で目が合った。

(顔が熱い。きつとわたし、顔赤くなってる)

もう22歳なのに、キスくらいでのぼせてしまうなんて。

「ふ、かわいいな」

そう言われると恥ずかしい。高宮さんは余裕たっぷりの不敵な表情だ。大人の男性だから、外国人みたいにキスくらい挨拶代わりなのだろうか。

「次これどう？」

そうやって渡された紙には『あーん、で食べさせる、10万円』と書いてあった。

キスより難易度が低い。なんだか中学生みたいなリクエストだ。ほっとしたような残念なような。ただ、それよりも気になることもある。

「いいんですか？ そんなことで10万円もお支払いいただいてしまったら
おずおずと聞いてみる。」

「はは、俺にお金の心配をするのはきみが初めてかもな」

「す、すみません、失礼なことを……」

そうだった。相手は時価総額3000億円企業のCEOなのだ。10万円は庶民には大金だけど、きっと端金なのだろう。

高宮さんがいいのであれば、わたしとしてはありがたいリクエストだ。

「はい、お願いします。これでいいですか？」

お酒のおつまみとして出されていた、リエットをのせたバケットを指さす。

「うん、いいよ」

「わかりました。では、はい、あーん」

バケットをつまみ上げて、高宮さんの口元へ運ぶ。

「ひゃっ♡」

ぱくつとバケットを食べたかと思いきや、そのまま指をペロリと舐められてしまった！

「ごめんごめん、これは追加料金が必要な」

「だ、大丈夫です！」高宮さんのペースに飲まれっぱなしだ。ただ、そのあとは『ハグ、10万円』、『手を繋ぐ、10万円』、『腰に手を回す、10万円』の3つのリクエストをドキドキしながらもこなしていった。

わたしに合わせてか中学生みたいなリクエストに大金を使わせてしまい申し訳なさすら感じた。累計50万、コンビニバイト335時間分だ。

ただ、高宮さんは楽しそうだし、スキンシップを通してわたしも打ち解けた気がした。

高宮さんって紳士なのかも、とこの時は思っていた。この子どもっぽいリクエストがこの後の布石だったなんて考えていなかった。彼はやっぱり頭が切れて怖い人だったのだ。

「じゃあ次はこれ」そう言って渡されたカードを読み上げる。

「お、おっぱいを触る。20万円」

（胸とかじゃなくておっぱいって言うんだ）

ついに来た、えっちなリクエスト。優しいリクエストで50万円も稼がせてもらったからなんとなく断りにくい。

（最後までするわけじゃないし、服の上からちよつと触るくらいなら……）

「はい、大丈夫です」ドキドキしながら答えた。

「へえ。嬉しいな、じゃあ早速」

そう言って長い指の綺麗な手が伸びてくる。爪は短く整えられている。

（この手に触られるんだ……）

両手で左右それぞれの胸が掴まれる。キスの時みたいに軽くタッチされるだけだと思っていた。服の上から掴まれて、寄せられて、しっかりと揉みしだかれる。

（おっぱい揉まれてしまった♡こんな場所で……♡）

行為を自覚すると少しえっちな気持ちになってしまう。雰囲気と行為に酔ってしまいそう。

「ふ、ふう♡」

手が離れたところで小さく息をつく。すかさずカードが渡される。

「えっ、下着姿になる、30万円……」

「嫌？」

「えっと、恥ずかしくて……」

（下着姿を見られちゃうなんて、もう遊びの域を超えちゃう……）

「ここには俺しかない。それなら50万にしよう」

「わ、わかりました」

のろのろとワンピースのボタンに手を掛ける。ボタンをはずして袖を抜いて、足を抜いた。

あの子に用意してもらった、ちょっとセクシーなブラックのブラとTバック。乳首がギリギリ隠れるデザインだ。ショーツの上からはガーターを付けている。

（着る時はこの姿を見せるって現実感がなくて、普段着ないようなこんなえっちな下着……恥ずかしいよお）

さつきまでののほほんとした雰囲気はどこかへ行ってしまった。高宮さんはじっと下着姿のわたしを値踏みするようにじっと見ている。

「清纯なフリして、黒Ｔバックとかエロすぎだろ。良く知らない男の前でそんな姿になって。見られるのが好きなのか？」

冗談なのか本気なのか分からないトーンで言われる。

「見られるのが、す、好きなわけじゃ……ないです」

「じゃあ、お金が好きなのかな？　だったら、これでお金追加してあげる」
そうやってカードが渡される。

「おっぱいと……お、おまんこを触る　１００万円」

おまんこなんて読み上げさせられることがすでに恥ずかしい。

（これ自体が羞恥プレイなんじゃないの!?!）

「どう？ 100万円だよ」

多分、やめるならここなのだと思う。でも今終わらせたら、きっとこれっきりだ。恥ずかしくてたまらないけど、どうなっちゃうのかほんの少しだけ気になっってしまう。

（高宮さんはどんな触り方をするのかな……？）

「は、はい、お願いします」

言ってしまった！ 高宮さんはニヤリと笑う。ソファの上で横並びから向かい合うように座らされる。片手が胸に、もう片方の手がショーツに這う。胸は大きな手でブラの上から揉まれる。

「んっ♡んっ♡あっ♡」

（声、出ちゃう。下着姿でおっぱい揉まれちゃってる♡手の感触……さつきよりはっきり感じる♡恥ずかしい♡でもおっぱい大きな手で揉まれるの気持ちいいよぉ♡）

揉んでいた手が止まり、高宮さんの手が脚を開かせようとする。

「あ♡ 脚、開くの恥ずかしい……♡」

「こうしないと触れないだろ」

「は、はい…♡」グッと脚を開かされた。

（脚、こんなに開かされてしまった。当然みたいに。俺のモノって言われてるみたい……）

開かせた脚の間、ショーツに手が伸びる。おへそ付近に手が触れて、そのままスーッ♡と下に手が伸びる。大事なところにすぐに触らずに少し上をくるく

ると撫でるようにされるとなんだか変な気持ちになる。でも気持ちいい。ついに、その下の割れ目に手が伸びた。

「あっ♡」高宮さんの人差し指がショーツ越しに割れ目にぴったり沿わされると声が出てしまった。

（パンツ薄いから♡直接触られてるみたい♡♡♡）

コス♡コス♡コス♡コス♡コス♡コス♡コス♡コス♡コス♡

指が前後に動いて、布越しに秘唇を何度も何度も刺激される。擦れるたびに快感が広がって、蜜液がとろり♡って膣壺から降りてきてしまう。

「あっ♡ああっ♡あんっ♡た、たかみ、やさあん♡んっ♡」

名前を呼ぶことで気を散らそうとしたけどダメだった。奥がジンジン♡してきて、つい腰を揺らしてしまう。

「感じてるんだ？ その声エロすぎ」

「そ、そんな、わたし……」

「見て。上から触っただけなのに、俺の手まで濡れてる」

人差し指を眼前に出されると、彼の指には愛液がとろり♡と滴っていた。

「だ、だって……♡」

恥ずかしくてどう言い訳していいか分からない。すると、人差し指がうねうね♡と動き出した。

「クリはどこかな？」ショーツ越しでもぷっくり腫れたそれを見つけるのは簡単で。

「やっ♡」

クリをピンッ♡って爪先で弾かれて思わず声がでる。

「クリ勃たせて、腰振って。どういいの？　ちゃんと言わなきゃ」

「え、えっと、指で触れるのが気持ちよくて……」

「だめだよ。ちゃんとクリとおまんこがって言わないと」

恥ずかしいことを殊更に言わせようとする。恥ずかしいけれど言われた通りにいやらしい言葉を使って答える。

「え、えっと、た、高宮さんの指がクリをカリカリ♡ってすると、おまんこがきゅん♡ってなっちゃうんです♡」

「いいね、ご褒美にもっとクリトリスを擦ってあげる」

高宮さんに叱られて、卑猥なことを言わされる。褒められると嬉しくて、卑猥なことを口にするのが気持ちが高まって、またおまんこがヌルヌル♡になってしまう。

カリカリ♡カリカリ♡カリカリ♡コスコス♡コスコス♡トントン♡

しつこいくらいに弄り回されて。

キュッ♡って親指と人差し指でクリトリスを摘ままれる。

「あっ♡だめ♡♡た、高宮さん、つまんだらっ、だめっ……ですう♡」

「なんで？ 下着越しだからいいでしょ」

優しいとか甘いとかはやっぱり間違ってた。

（やっぱり見かけ通りドS！　そしていじめられて気持ちよくなってるわたしはMなの……？♡）

クリクリ♡ニルニル♡クリクリ♡クリクリ♡ニルニル♡

擦りつぶされるようにクリトリスをこねられた。

「あっ♡あっ♡あっ♡……あんっ♡」

「……紙、書いてる余裕ない。直接おまんこ乳首を舐めていじってイカせるから。100万ね。どう？　いいなら、何されるかちゃんと行って」

「ひゃ、100万円で高宮さんにおまんこと乳首を舐められて、いじられて、イカされます……♡」

もう、頭が働かない。言われたことを繰り返すのがやっとだ。

「よし、あつ、これも追加で、100万」

そう言う和高宮さんの顔が近づいてきて……。

「んっ♡」

唇が唇で塞がれた。

（キス……♡気持ちいい♡最初のとは……全然違う。吸い付くみたいで……。
気持ちいいよぉ♡）

激しいキス。唇が腫れてしまうほどに強くて長くて、息ができなくて酸欠で頭がくらくらする。

長いキスのわずかな合間にはあ♡はあ♡と息をする。

わずかに開いた唇の隙間に舌が侵入してきた。強いお酒の香りとヒルみたい
にヌルヌル♡した舌が口内を犯してくる。

「んっ♡んんっ♡」ってくぐもった声をだしてしまう。

（舌……♡入ってきた♡ヌルヌルで気持ちよくて♡奥、きゅん♡とする♡）
しびれるような快感でおまんこがまたじゅん♡って愛液を溢れさせてる。

上下の歯列をヌルッ♡って舐め上げられて、唾液じゅるっ♡って音を立てて
吸われる。

その間も高宮さんの手は止まらない。背中に回された手でブラのホックが外
された。谷間を盛るための締め付けから解放されて丸い双丘がぷるん♡って顔
をだす。

「さすがFの70。形もいいし、白くて綺麗だ。たまらないな」

「えっ、なんでサイズ……」

「ま、そんなのどうでもいいじゃん」

誤魔化すように言うのと両手でおっぱいをむにゅ♡っを持ち上げるように触る。そのまま力強く揉まれる。彼の指にムチっ♡って柔肉が食い込む。

「柔らかいね、感度もいい」

「あっ♡あん♡」もう、声が止まらない。

（あちこち触られて♡体熱い♡すごくえっちな気持ちになっちゃってる♡膣の奥♡ジンジン♡するよぉ♡）

布の少ないTバックはびっしり♡になるほど愛液を吸っている。

「乳首。小さくて、色が薄い。感度はどうかな？」

乳輪の縁をなぞりながら言われる。

（直接おっぱい揉まれるだけで濡れちゃうのに♡乳首触られたら♡）

「ふふ、ちょっと触っただけで、感じてるの？　きみの乳首えっちだね。ゆっくり可愛がってあげるから」

そう言われてゾクゾク♡とまた感じてしまう。ついに乳首に指がかかる。爪先でほじるようにコリコリ♡される。そうかと思ったら、指で押しつぶすようにキュッ♡とつままれる。

「ひゃんっ♡ち、乳首つまむの、ダメですっ♡」

「ふふ、なんで？　体は喜んでるみたいだけど、見て。乳首、尖ってきてる」（やめてって言って、やめてもらえるとききかない）